

途上国の貧困問題を解決するために経済学は役立つの？

途上国におけるさまざまな貧困問題を、経済学的なツールで分析する学問、それが開発経済学です。開発経済学を学ぶ際にお薦めの本と、大学4年間の学習計画の一例を紹介します。

黒崎 卓

Takashi Kurosaki

一橋大学経済研究所教授

1 開発経済学とは

2014年度のノーベル平和賞を、パキスタンのマララ・ユスフザイさんと、インドのカイラシュ・サトヤルティーさんが受賞しました。その理由として、2人が、子どもや若者への抑圧に反対し、すべての子どもが教育を受ける権利を求めて闘ってきたことが挙げられています。私は、2人の出身国であるパキスタンとインドを主なフィールドに、開発経済学の研究を行ってきましたので、この受賞をとてもうれしく感じました。

この話、経済学と直接関係がないように聞こえるかもしれませんが。しかしそうではありません。私たちが住む地球には、開発途上国と呼ばれる多くの国があり、恵まれた生活水準の日本からは想像もできない貧困問題がまだ残っています。学校に行けず、働いている子どもが多数存在するという児童労働もそのひとつです。子どもが教育を受けることは、それ自体に価値があるだけでなく、貧困削減

の手段としても有効です。子どもが高度な知識を身につけた大人になったときに、その国の社会や産業をより高度に発展させていくことができるからです。

しかし、児童労働をなくし、すべての子どもがきちんとした質の教育を受けられるようにするには、法律で児童労働を禁止し、政府が学校の数を増やすだけでは不十分です。なぜなら、家が貧しくてやむを得ず子どもが働きに出ている場合には、単純に児童労働を法律で禁止しても問題の解決にはならないからです。子どもは違法な労働現場で、より過酷な条件での労働を強いられることになるかもしれません。また、せっかく高等教育を受け

著者紹介

1964年生まれ。スタンフォード大学大学院博士課程修了(Ph.D.)。アジア経済研究所研究員、一橋大学経済研究所助教授を経て、2005年より現職。専門は開発経済学。論文、著書：“Insurance Market Efficiency and Crop Choices in Pakistan,” *Journal of Development Economics*, 67(2), pp.419-453 (2002年、共著)、『貧困と脆弱性の経済分析』(勁草書房、2009年)ほか。

でも、それを活用できる仕事はその国になければ、親もわざわざ子どもに教育を受けさせようという気にならないかもしれません。親と子ども、教員と地域社会などが、自ら進んで児童労働撲滅と教育普及に取り組むことが必要です。そこで鍵になるのが、奨学金や補助金、給与の支払い方法など、経済的なインセンティブなのです。このような観点から、途上国の教育と児童労働に関する応用経済学的な研究が多数進められています（大塚・黒崎編著 2003, 黒崎 2014, 2015）。

ここまでは教育という一側面について説明してきましたが、途上国では、教育だけでなく、日常のさまざまな消費や、保健、国民の政治参加などの他の面でも低い水準にあることが知られています。途上国において貧困層の生活水準を改善するにはどうしたらよいでしょうか？ この問題に取り組むのがdevelopment economicsという学問です。日本語では、「開発経済学」あるいは「経済発展論」と訳されます。英語のdevelopには自動詞と他動詞の両方の意味があります。「経済発展論」という科目名には、途上国はどのようにしてこれまで発展してきたのかを分析するという自動詞のニュアンス、「開発経済学」という科目名には、どうすればうまく途上国を発展させることができるかを考察するという他動詞のニュアンスがうかがえます。

2 履修計画の一例

以下では、開発経済学・経済発展論を履修して、途上国の貧困問題について考えていくための大学4年間の学習計画の一例を示したいと思います。

1年生でしてほしいこと、それは途上国に対する関心を深め、経済学の入門科目を履修

することです。

開発経済学は、現実の途上国が実際に抱える問題を解決するための実践的な学問です。ですので、何が問題なのかを、低学年のうちに幅広く知ることが大切です。自分の目で見るには現地体験。バックパッカーとしての旅行もよいですが、途上国の開発に携わるNGOによるインターンの機会が学生向けに増えていますので、挑戦してみることをお勧めします。ただし多忙なNGOの足手まといになってもいけませんので、インターンは1年生の終わりや2年生になってからのほうがよいかもしれません。

読書では、個人的に感銘を受けた本を挙げてみたいと思います。途上国の農業開発の負の側面とそこにわれわれ日本人がどうかかわっているのかを明らかにした古典的名作の鶴見（1982）、マイクロファイナンスを生み出した成功談が生き生きと描かれるYunus（1998）、国家と経済発展の関係における予想外の展開が読者を虜にする高野（2013）などをお勧めします。他には、Sen（1999）、Collier（2007）、Easterly（2001）、Deaton（2013）なども、途上国の開発問題へのよい導入になるでしょう。

座学と実体験の両方を通じて途上国への関心が高まったならば、それを活かせるような自分のキャリアについて考えることも、できるだけ早く始めてください。「国際協力にかかわりたいから、開発経済学の修士号を取りたい」という進路相談をよく受けるのですが、私の答えは、「あまりよい選択とは言えませんね」となります。もっと実践的な専門分野での修士課程を目指すか、開発経済学の分野であれば、初めから博士号を視野に入れることが不可欠だからです。より詳しくは、毎年発行される『国際協力ガイド』や山本（2007）などを参照してください。

2年生では、それまでに高めた途上国への関心を、開発経済学という学問の枠組みで考えることを意識しながら、経済学専門科目の入門コースを履修してください。開発経済学の分析手法の基礎は、**ミクロ経済学、マクロ経済学、統計学・計量経済学**ですので、これらの初級レベルを身につける必要があります。

近年の開発経済学で何が問題になっているかを学べる入門書が、豊富に刊行されています。ここでは日本語で読めるもののお薦めを紹介します。黒崎・栗田(近刊)、大塚(2014)、Karlán and Appel(2011)、Banerjee and Duflo(2011)、Collins et al.(2009)、Fisman and Miguel(2008)です。開発経済学の実証手法は、2000年代以降、ランダム化比較試験(Randomized Controlled Trial; RCT)および行動経済学によって革新され、どのような政策介入が貧困削減に効果があるのかが徐々に明らかになってきました。また、開発経済学の分析対象として、政治経済学的側面への関心が高まっています。これらの入門書を通じて、皆さんが途上国のどんな問題を経済学のツールを使って考えたいか、関心を徐々に絞って行ってください。

さて3年生。開発経済学の手法について教科書で学ぶ学年だと思えます。開発経済学関連の科目が開講されていれば、ぜひ履修してください。開発経済学の教科書としてお薦めは、黒崎・栗田(近刊)、ジェトロ・アジア経済研究所他(2015)、黒崎・山形(2003)、速水(2000)、鳥居(1979)です。開発経済学の学説史の変遷に関する素晴らしい展望書として、絵所(1997)も必読書です。開発経済学が扱う問題や分析手法は、学問の発展とともに拡大を続け、教科書の内容も年代ごとに変化しています。たとえば2000年代後半以降とそれ以前の教科書では、RCTや行動経済学が

含まれているか否かの違いがあります。しかし、開発経済学の基礎となるのはミクロ経済学であり、昔の教科書には、その基礎の説明が丁寧で、ミクロのモデルをマクロの経済発展に関連づける視点も明確な良書が多くあります。この意味で、速水(2000)や鳥居(1979)は今でも有益です。

経済学のその他の科目の履修も同時に進めてください。ミクロ経済学、マクロ経済学、統計学・計量経済学は、入門科目から次のレベルに進む必要があります。また、近年の開発経済学で多用されている手法ですので、**ゲーム理論、行動経済学、労働経済学**を履修することもお薦めします。

これらの科目の履修がある程度進んだ段階で、1~2年生時のお薦め書をもう一度読み直すとよいでしょう。経済学の基礎知識を得た段階ですので、当初には見落とした重要な経済学的議論に気づくはずです。冒頭で紹介した教育普及と児童労働撲滅の例に関しても、経済的インセンティブを適切に設計すれば、親と子ども、教員と地域社会などが、自ら進んで取り組むことがわかると思います。関心ある開発分野あるいは対象国についての知識が深まれば、4年生で取り組むゼミ論や卒業論文のテーマがより具体的なものになってくるでしょう。

4年生ではゼミ論や卒業論文などをまとめつつ、進路を決めることになります。大学院に進学する場合には、ミクロ経済学、マクロ経済学、統計学・計量経済学、ゲーム理論、行動経済学、労働経済学といった科目の知識を、さらにレベルアップしておく必要があります。

参考文献

- 絵所秀紀 (1997) 『開発の政治経済学』日本評論社
- 大塚啓二郎 (2014) 『なぜ貧しい国はなくなるのか——正しい開発戦略を考える』日本経済新聞出版社
- 大塚啓二郎・黒崎卓編著 (2003) 『教育と経済発展——途上国における貧困削減に向けて』東洋経済新報社
- 黒崎卓 (2014) 「途上国、教育普及へ工夫を『金融』で児童労働削減」『日本経済新聞』経済教室、11月3日朝刊
- 黒崎卓 (2015) 「教育普及——産業発展につながる教育支援」黒崎卓・大塚啓二郎編著『これからの日本の国際協力——ビッグ・ドナーからスマート・ドナーへ』日本評論社、pp.243-259.
- 黒崎卓・栗田匡相 (近刊) 『ストーリーで学ぶ開発経済学——途上国の暮らしを考える』有斐閣ストゥディア
- 黒崎卓・山形辰史 (2003) 『開発経済学——貧困削減へのアプローチ』日本評論社
- 国際開発ジャーナル社『国際協力ガイド』各年版、国際開発ジャーナル社
- ジェトロ・アジア経済研究所・黒岩郁雄・高橋和志・山形辰史編 (2015) 『テキストブック 開発経済学』第3版、有斐閣ブックス
- 高野秀行 (2013) 『謎の独立国家ソマリランド——そして海賊国家ブントランドと戦国南部ソマリア』本の雑誌社
- 鶴見良行 (1982) 『バナナと日本人——フィリピン農園と食卓のあいだ』岩波新書
- 鳥居泰彦 (1979) 『経済学入門叢書10 経済発展理論』東洋経済新報社
- 速水佑次郎 (2000) 『現代経済学選書11 新版 開発経済学——諸国民の貧困と富』創文社
- 山本敏晴 (2007) 『国際協力師になるために』白水社
- Banerjee, Abhijit V. and Esther Duflo (2011) *Poor Economics: A Radical Rethinking of the Way to Fight Global Poverty*, PublicAffairs (山形浩生訳『貧乏人の経済学——もういちど貧困問題を根っこから考える』みすず書房、2012年).
- Collier, Paul (2007) *The Bottom Billion: Why the Poorest Countries are Failing and What Can Be Done About It*, Oxford University Press (中谷和男訳『最底辺の10億人——最も貧しい国々のために本当になすべきことは何か?』日経BP社、2008年).
- Collins, Daryl, Jonathan Morduch, Stuart Rutherford and Orlanda Ruthven (2009) *Portfolios of the Poor: How the World's Poor Live on \$2 a Day*, Princeton University Press (野上裕生監修、大川修二訳『最底辺のポートフォリオ——1日2ドルで暮らすということ』みすず書房、2011年).
- Deaton, Angus (2013) *The Great Escape: Health, Wealth, and the Origins of Inequality*, Princeton University Press (松本裕訳『大脱出——健康、お金、格差の起源』みすず書房、2014年).
- Easterly, William R. (2001) *The Elusive Quest for Growth: Economist's Adventures and Misadventures in the Tropics*, the MIT Press. (小浜裕久・織井啓介・富田陽子訳『エコノミスト 南の貧困と闘う』東洋経済新報社、2003年).
- Fisman, Raymond and Edward Miguel (2008) *Economic Gangsters: Corruption, Violence, and the Poverty of Nations*, Princeton University Press (田村勝省訳、溝口哲郎解説『悪い奴ほど合理的——腐敗・暴力・貧困の経済学』NTT出版、2014年).
- Karlan, Dean and Jacob Appel (2011) *More Than Good Intentions: Improving the Ways the World's Poor Borrow, Save, Farm, Learn, and Stay Healthy*, Plume (清川幸美訳、澤田康幸解説『善意で貧困はなくせるのか? ——貧乏人の行動経済学』みすず書房、2013年).
- Sen, Amartya (1999) *Development as Freedom*, Oxford University Press (石塚雅彦訳『自由と経済開発』日本経済新聞社、2000年).
- Yunus, Muhammad with Alan Jolis (1998) *Banker to the Poor: Micro-Lending and the Battle Against World Poverty*, PublicAffairs (猪熊弘子訳『ムハマド・ユヌス自伝——貧困なき世界をめざす銀行家』早川書房、1998年).